

障害理解に関する中学生を対象とした意識調査について

～健聴中学生を対象とした質問紙調査結果の比較から～

○金子俊明* 廣瀬由美* 太田康子* 加藤靖佳**

(*筑波大学附属聴覚特別支援学校) (**筑波大学人間系)

KEY WORDS: 障害理解 健聴中学生 質問紙調査

1. 目的

障害理解促進に関する研究の一環として、金子(2015)は健聴中学生の聴覚障害に関するイメージについての調査結果を報告し、障害に関する知識と交流体験を基にしたイメージの重要性を示した。また、実際の学習プログラムについては、金子他(2013)及び廣瀬他(2015)が公立中学校での健聴中学生を対象とした障害理解促進に関する授業の評価を述べた。授業の対象となる健聴中学生が聴覚障害に関してどのような意識を持っているのかについては、知見が必ずしも多くはないのが現状である。そこで著者らは2004年に行った質問紙調査の調査項目を再検討し、2015年にA中学校の1年生を対象として同様の意識調査を行った。そしてかつての調査結果(2004年,2008年)と2015年の調査結果を比較した。この検討結果について報告する。

2. 方法

(1)質問紙調査の項目

2015年の質問紙調査では、質問項目に関して前回の調査と同様、5つのカテゴリーを設定し、10項目にした。

A.聴覚障害生徒との意思の伝達(手話の活用、音声の活用、読話、文字の活用)

B.学校の環境(チャイムの有無)

C.学習(教科書、音楽)

D.耳や聴覚障害に関する知識(きこえの障害、補聴器の活用)

E.テレビの字幕の活用

A～Eのそれぞれの質問項目について、五件法(5:たいへんそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:そう思わない、1:全くそう思わない)により回答を求めた。

(2)対象(2015年の調査)

国立大学附属A中学校の中1生徒199名(男子99名、女子100名)

(3)質問紙調査の実施

2015年10月～11月に、A中学校において学級ごとに調査を実施した。

(4)質問紙調査結果の比較

上記のA中学校及びB中学校の中1生徒(計231名)を対象として行った過去の意識調査結果と、2015年に実施したA中学校での意識調査(計199名)の結果を比較し、回答状況の特徴について検討した。

3. 結果

(1)聴覚障害生徒との意思の伝達

「手話を覚えて会話をすれば通じる」(手話の活用)について、2015年調査では「たいへんそう思う」「そう思う」と答えた生徒は併せて66.3%(132/199)であった。これに対して、かつての調査結果は53.2%(123/231)であった。「大きな声で話せばよい」(音声の活用)については、2015年調査では「たいへんそう思う」「そう思う」と答えた生徒は併せて72.3%(144/199)となり、かつての調査で得られた50.6%(117/231)よりも高かった。読話についてはいずれの年度でも高かった。「内容を紙に書けばよい」(文字の活用)については、2015年調査では「たいへんそう思う」「そう思う」と答えた生徒が87.98%を占め

(175/199)、かつての62.3%(144/231)よりも高かった。(2)学校の環境(チャイムの有無)

2015年調査では34.7%(69/199)がチャイムについて答えており、むしろ静かな学習環境というイメージであった。

(3)学習(教科書、音楽)

「特別な教科書を使っている」に対して、「そう思う」と答えた生徒はかつての調査では71.4%(165/231)であった。これに対して2015年調査では39.2%(78/199)であった。

「音楽への興味」(音楽)については、2015年調査の場合63.3%(126/199)が肯定的であった。

(4)耳や聴覚障害に関する知識

「補聴器を使うと音ははっきり聞こえる」(補聴器の活用)に関しては、かつての調査で「そう思う」と回答した生徒は73.2%(169/231)であったが、2015年調査では18.1%(36/199)を示した。きこえへの理解が増していた。

(5)テレビの字幕の活用

字幕については、2回の調査とも高い評価結果であった。

(6)聴覚障害についてのイメージ

かつての調査では、「とくになし」(23.6%)、「その他」(14.7%)、「頑張っている・努力している」(13.7%)の順であった。2015年調査では、「その他」(24.6%)、「頑張っている・努力している」(18.2%)、「(私たち)変わらない」(14.1%)の順になった。「その他」の内訳では接し方に関する回答が多く、差別・偏見の解消に関するコメントも見られた。筑波大学教育局主催のイベントに関わる記入もあり、少しずつプラスの方向に進んでいると考えられる。

4. 考察

2015年調査では、コミュニケーションに関する生徒の知識が増し、実際の接し方に関する意見が多くなっていった。一方、文字情報に関する期待も高かった。聴覚障害に関するイメージにも変化が認められた。今回の比較検討では、2015年の調査結果に関して全体的な特徴を抽出できた。今後はさらに詳細な分析を行うことが課題になっている。

(謝辞)

本研究を進めるにあたり、A中学校の生徒・教職員の皆様、筑波大学人間系加藤研究室の学生の皆さんにご協力いただきました。記して感謝の意を表します。

(文献)

金子俊明・加藤靖佳(2013) 障害理解の促進をめざした授業に関する評価～普通中学校生徒を対象とした出前授業についての質問紙調査から～,日本特殊教育学会

金子俊明(2015) 中学生を対象とした障害理解に関する意識調査～手話・補聴器に関する意識と聴覚障害に対するイメージについて～,附属聴覚特別支援学校と大学との連携による研究報告会配付資料

廣瀬由美他(2015) 障害理解の促進をめざした授業に関する評価(2)～難聴シミュレーションや手話ソングなどの体験学習についての質問紙調査から～,日本特殊教育学会

(KANEKO Toshiaki, HIROSE Yumi, OTA Yasuko, KATO Yasuyoshi)